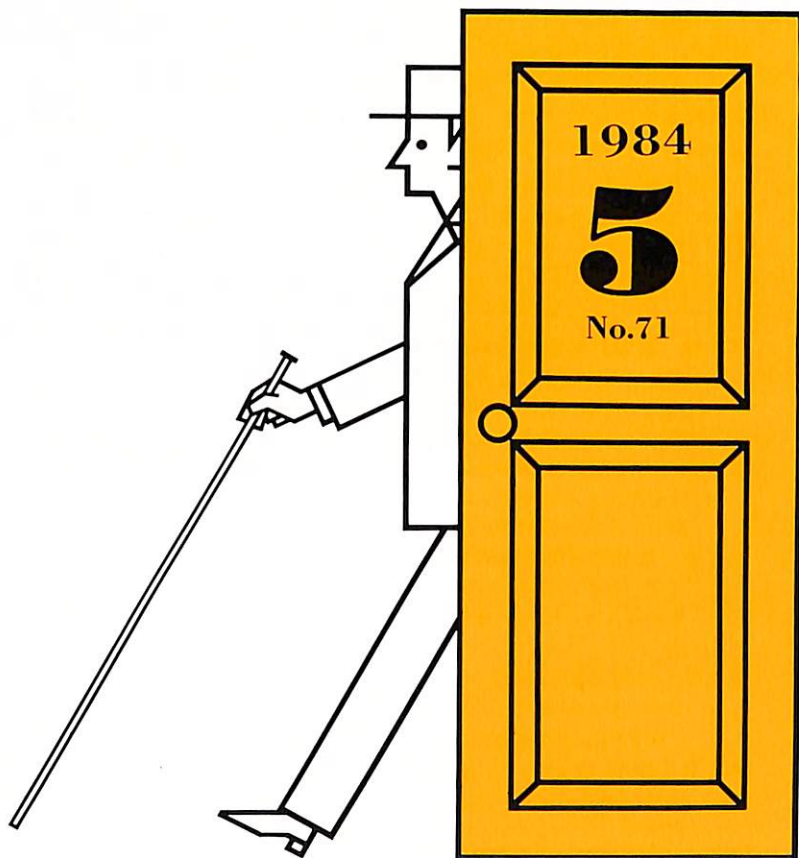


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和五十九年四月一五日 SSK通巻第一一八七号 (毎月六回 5の日、0の日発行)

視覚 障害

その研究と情報

特集＊盲学校は今



ISSN 0385-7476
SSK

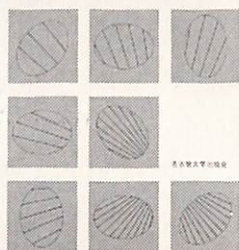
視覚障害とその代行技術

編著 市川 宏(名古屋大学教授)
大頭 仁(早稲田大学教授)
鳥居修晃(東京大学教授)
和氣典二(宇都宮大学教授)

定価 3,800円
A5判上製箱入・310頁

視覚障害とその代行技術

編著：市川 宏・大頭 仁・鳥居修晃・和氣典二



本書は、わが国における視覚代行機器の研究過程と、感覚を機器で代行する技術開発にあたって解決を必要とする心理学的、生理学的諸問題を整理し紹介する。盲人への正しい理解と最近の視覚代行器の開発が、盲人に新しい夢を与え、生活環境を豊かにする可能性を開きつつあることを示す。

おもな内容

第1章 医学的側面からみた視覚障害……市川 宏

視覚障害の基本的な考え方／盲と遺伝／先天盲と中途失明の違い／先天盲の検査について／視覚障害の統計／重度視覚障害児の実態／重複障害／視性刺激遮断による視覚障害／老人の視覚障害／高度視覚障害者のリハビリテーション

第2章 心理学的側面からみた視覚障害……鳥居修晃・望月登志子

視覚障害と認知機能／開眼手術と認知機能／眼球運動とその制御／視覚機能の開発／形態視機能の習得

第3章 視覚代行のための生理工学……大頭 仁

視覚の代行／視覚代行の基本的構想／代行感覚としての触覚と聴覚／機械的皮膚刺激とその受容／電気的皮膚刺激とその受容／触覚と聴覚によるパターン認識

第4章 知的活動の補助……和氣典二

知的活動と視覚代行／従来の経緯／最近の動向／受動的な知覚を利用する機器／能動的な知覚を利用する機器／点字技術と点字複製装置／音声出力技術

第5章 歩行補助……清水 豊

研究の現状／白杖による歩行／電子技術を用いた歩行補助器／わが国の歩行補助研究

附章 感覚代行研究会の活動／感覚代行シンポジウム発表論文および講演一覧

名古屋大学出版会

名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
電話052(781)5027 振替 名古屋2-11638

目 次

1984年 5月 No.71

2 ページ評論	及川巳佐男	2
特集 盲学校は今		
小学校との交流の現状と課題	下川 広治	5
小学校弱視指導の現状と課題	浅野仁一郎	10
小学部重複障害児教育の現状と課題	川幅 善久	17
少人数化の利点を生かして	津田 圀子	22
盲学校の幼稚部における現状と課題	酒井 宏三	29
この人と語る		
海外に学ぶ	和波孝禧・錢本三千年	36
ボランティア西・東 点字あゆみの会をたずねて		
—— 盲大生を支えて18年 ——		46
インフォメーション・コーナー		55
小・中学校「点字クラブ」の調査研究	藤井 聡尚・大川 敦司	63
『視覚障害』 総目次		69
編集後記		74



早期教育の充実を期して

北海道函館盲学校長 及 川 巳佐男

数年来、全国盲学校に幼稚部3歳児学級開設の機運が高まっており、現在、幼稚部設置校48校中12校ほどに及び、逐年増設の傾向にあることは喜ばしいことである。

さらに、養護学校義務制施行を契機とし、各障害別にわたる早期、後期中等教育に関する重要課題に対処するため、特に設けられた「特殊教育研究調査協力者会議」の報告が、57年10月に文部省から公表されたことにより、早期教育のあり方に関する認識が深まり、諸施策の推進と相まって一層の充実改善が図られていくものと考えている。

早期教育の必要性和意義については、視覚障害児は、外界からの情報収集に大きな制約を受けるため、養育の過程で適切な対応や指導が行われない場合、外界に対する興味や関心、対象物に対する積極的な働きかけ、動作等の模倣、空間関係等の把握、言葉と事物・事象との対応関係の認識などに発達上の様々な問題が生ずる。そこで、このような視覚障害児の特性に応じた指導や援助を行うとともに、適切な環境を準備して、充実した乳幼児期を過ごさせることにより、望ましい成長発達を促すところにあるとされている。

早期教育のあり方は、3歳未満までの家庭教育を中心とする時期と、3歳以降の就学前教育に大別されるが、本校の実例から、今年度入学の3・4歳児5人の実態を考察してみると、発達診断上、個々の家庭環境により顕著な差異がみられ、乳幼児期の対応がいかに重要であるかを痛感させられている。

本校でも、母親等に対し、視覚障害児のための配慮事項を加味し

た育児の方法を指導して、家庭教育の充実を図ることを主眼に、3歳児学級開設前年までは、0歳～2歳児を月2回、3歳児は週1回程度、母子教室の形で教育相談を実施してきており、それなりの効果はあったと思うが、それでも、母親の都合や幼児の体調、睡眠の状態を理由に指定された相談日に連れて来られない場合もあり、全体的に相談回数不足で不十分な面が多かったという反省をもっている。それを補うための学校体制の措置も必要ではあるが、やはり、当事者意識として、早期発見、早期治療、乳幼児期の育て方の重要さといった原則論を具体的な形で各家庭に浸透させていくことが最も肝要ではなかろうかと考えている。

保護者に育児の方法を指導していく上で、幼稚部担当教諭だけでは、勤務上の制約や専門以外の育児方法の知識、経験等の面から、どうしても限界が生ずることは否定できない。

そこで、保育指導の専門家である保健婦との提携を、一方策として考えてみてはどうだろうか。（障害発見後、相談のため来校した保健婦との協力実績あり）実際、保健婦は、妊娠婦時から、出産、障害発見、発育状態に至るまで、直接家庭に入って指導しており、その面では母親に対し相当の説得力をもっている。これらの事情から、地元保健所の理解協力を求め、保健婦は基本的育児法の面から、教諭は視覚障害専門の立場で、家庭養育の充実を図っていきけるような協力体制が確立されることを強く望んでいるところである。

以上、乳幼児期の家庭教育の対応に観点を置いて述べてきたが、ほか、重複幼児対応、学級構成、環境整備、交流教育、幼稚部担当教諭の研修等、当面する課題の山積みが学校現場の実状である。

いずれにしても、幼児一人一人の生きている現況のなかで、確実に獲得してきている力がどんな性質のものかを客観的に見極め、適切な対応手段をもって早期教育の充実を期していきたいものと願っている。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

— 編 集 後 記 —

今回は、しばらくぶりで盲学校教育を特集しました。現場の悩みや苦しみがひしひしと感じられる力作が寄せられました。文部省の強い指導のもとに、一見平穏に見える盲学校も、中に入ってみるといろいろな問題が山積みされているようです。4月から東京と埼玉で公立高校に全盲生が入学し、公立高校のインテグレーションは4人になりました。これからは、盲学校に対する社会からの問いかけがますます強くなるものと思われます。盲学校の将来を見通し、百年の計をたてる時期が、もうそこに来ているのではないのでしょうか。特集を執筆していただいた先生方に感謝申しあげます。

本号から購読料を値上げさせていただきましたが、それを機に内容を少し変えてみました。「この人と語る」「ボランティア西・東」などの新しい企画を加え、ページ数をふやしました。その反面グラビアをけずってみましたが、皆さまのお考えはいかがでしょう？ご意見やご感想を編集部までお寄せいただければ幸いです。

次号では、点字図書館と公共図書館の役割り、点字図書館はどうあるべきか、視覚障害者のニーズは何か、などについて特集する予定です。

(田中 徹二)

視 覚 障 害	1984年 5 月 No.71
年間購読料	3,000円 (送料とも)
発行日	1984年 5 月 1 日
編集人 (連絡先)	
日 本 盲 人 福 祉 研 究 会	
〒160 東京都新宿区高田馬場1丁目	
日本点字図書館内 23番4号	
電話 (03) 200-1130	
振替口座 東京 6-16103	
発行人	身体障害者団体定期刊行物協会
〒157 東京都世田谷区砧8-21-3	
印刷所	合同印刷株式会社
〒130 東京都墨田区業平2-9-13	
電 話 (624) 6111 (代表)	

協賛団体 日本点字図書館